●――〔西田哲学講義〕

「場所的論理と宗教的世界観」について（終）

講義●中山延二 編集●本多正昭 協力●吉田真一

第一章　付録――罪についての討論

本多　それでは次に移りましょうか。

三嶋　きのう、夕べ時間が遅くなって云いそびれたんですが、悪と罪を、どう区別すればよろしいですか。

中山　さあこれは、あんたらの方が専門とちがうかいな。

本多　僕は罪というのは主体的な、作用的なものと、それから悪というのはその結果、対象的なものと考えてますけどね。理論化されたもの、と。

宮崎　悪には、そしたら論理的な構造がなくて、罪には論理的な構造がなくて、罪には論理的な構造があるといわれることですか。

中山　そうではない。

本多　逆ですね。

宮崎　その逆ですか。

本多　むしろね、悪というのが抽象化されたものでね、理論化されたもので、概念的な。まあ罪も概念ですけどね。どっちかというと、罪というのはやっぱり一人一人の作用ですね。

三嶋　宗教は悪よりも罪……。

中山　これはむしろ、こういうことがおだやかとちがいますか。罪というたらね、必ず悪と別にあることでなしに、必ず悪という意味も含んでおる、と。悪というた時にはね、悪を主として云いよるんじゃけれども、その中には必ず罪ということも含まれておるんではないかと。

本多　罪を犯すということは、悪でしょ。

中山　そうそう、そいでこれをですね、先生の答になるなら

んは別としてでっせ。教育的にね、この悪というものはね、決して罪と考えたらいかんぞ、とわしゃ云うんです。そこで罪と罰との問題になるでしょ。で、もう一つ云ったら、罪ではあっても、という時に悪を含んでいるからわしゃそれ云うんですけど、これを罰するということではないぞと、教育的にはね。これは裁判官のやることで警察のいうところの罪と罰とのこっちゃけれども。教育的においては、罪必ずしも罰として与えるものではないんで、こりゃ教育ではない。罪はどこまでも否定的媒介として善に転換させることなんだ、これが教育なんだと。罰を与えて、遅刻したから掃除せいなんていうような罰をやっていることは教育ではないと、わしゃ云うんです。そいじゃやっぱり、掃除ということの、美に対する積極的な意味があるからして、罰に掃除させることはとんでもないこっちゃ。教育には罪ということが入ったらいかんという。そういう意味の罪ということに悪も含めてわしゃ云いよるんですよ。で、だいたいね、我々が平素、善悪というておることはええ加減なことですよ。人間が勝手にこさえたことだけなんで。やっぱり善悪不二ちゅうのがほんとでしょ。相即的な立場から見れば。こっち側だけに行ったら悪になるし、こっち側だけを善という、そんなのは具体的な善じゃないというんですよ。悪即善、これが善だし、善即悪ちゅうのは、これが悪だと。

本多　スコラ哲学でもですね、すべての存在、すべての作用は善だと考えるんですね。で、悪そのものというのは存在しないんです。

中山　そうそう。

本多　で、いわゆる悪と罪というのは何かというと、善の欠如です。善が足りない。足りないだけであって善がないんじゃないですね。だから何もかも善で、泥棒するというのも善なんですね。あれ。何かちゃんとした積極的な目的があってやっている。

中山　仏教では悪無体といってね。体がないとしてあるんですよ。影のようなもんじゃとして。体が実体的にあるんじゃない。無明体なし、とこういう。悪の根源は、無明と押えますからね。無明体無しという。これが原則です。それは、悪というのを対象的に考えとるから、そういうことで否定してしまうわけですね。

本多　ああ、そうですね。

網沢　盗人の立場からみたら、盗むことは善になる……。だから……。

本多　だから人間のやることは全部、善を含んでいるわけですね。

中山　で、この立場から云うたら人間のいう善を含んでおるが、その善というたらいつも悪を含んどる、というこった。

本多　はは、そうです。欠如を含んでいる。完全でない。だからそういう意味で善悪不二と。

中山　ほやから人間にね、欲望を満足したということはあらへんでっせ。満足しないのが欲望なんやからして。ほじゃから満足ということは必ず不満足を含んでおると。不満足という一面には満足ということを含んでおると。それがほんとの満足といい不満足という意味なんで、我々は不満足といったら徹底的に一生涯不満ばっかり出てきよる。これは非常に抽象的な考え方なんで。満足即不満足、不満足即満足、ということ。

本多　だから満たされつつ渇わき、渇わきつつ満たされると。

中山　そうそう、それが作られたものから作るものへという論理になってきよるんですがな。だから不満足を含んどらん満足ちゅうもんは、抽象的なんだ。ただ頭の中で満足なんて考えておるだけのこと。ほんとの具体的な、我々の世界の満足ちゅうたら、必ず不満足ということを、この段階段階において、満足ということを考えていけ、と。それには不満足がひっついとる、とこういう。完全即不完全、不完全即完全。人間のつくりだしたもの、作られたものに完全なものがあるはずはないんですよ。ほやから、作られたものから作るものへという無限の運動、ということになってくるわけですわね。完全なるものは一個もない。で、我々が完全というとるのはまあ、ひと区切り区切ってそして段落をつけると完全と。完全はいつでも不完全を含んでいるということが、完全の具体的な意味なんだ、という。それを離れて完全、完全なんていうとるのは抽象的やと、こういうですね。我々が考えとる、あのう満足だけだと、完全だけである、とこういうことなんです。そいで非連続の連続になるんですね、必ず完全というものは矛盾を、それ自身を否定するものを含んでおるということ、そういうことなんですよ。ほんで現在から現在へ、その現在はいつでも満足即不満足、不満足即満足という、こういうものをかかえこんでるという、こういうんです。

本多　すると絶望することもないし……。

中山　そうそう。

本多　有頂天になることもないですね。

中山　そうそう。

網沢　職場の問題が一番そういうことがあてはまるんじゃないですか。職場が面白うないということは、すでに比較して……。

本多　不満だけにかたよっている。

網沢　不満にだけかたよっている。けど職場があるということ自体は恵まれているということにまず思い到るということが大事なんでしょうなあ。

本多　えーと。さっきの問題に戻りますけど。

三嶋　えーと、場所的論理と宗教的世界観を論じているはずなんですね、この論文。宗教といえば少なくとも否定的な契機として人間の死と、それから罪ということがどの宗教でもついてまわると思うんですね。西田哲学、この論文でそれに

対する答が得られるんだろうか。

中山　得られますよ、宗教の世界なんてのは、そればかりやと云ってもいいんですよ。

三嶋　きのうちょっとどなたかが云われたんですが、悪と罪とできれば今のうちにすべてを聞いておきたいんですが……。

本多　先生ご自身はどういう風に……。そうおっしゃるからには、何らかの意味で回答をもっとられると思うんですけど。

中山　そりゃその通りですよ。

三嶋　結論は出ていないんですけどね。

本多　どう思われるかを。これもね、西洋で既成概念が入っていると、これを転換するのはむずかしいですね。ほんとに僕は苦労してますわ。先生はもっと苦労されるかも知れません。もっと徹底してやっておられるから。

三嶋　悪と罪というのは、全然別の次元で。僕はかみ合わない事柄だと思っているんですね。で、普通それをある意味で重なり合うように理解しているけど、かみ合わない。次元がちがうっていうんですかね。善悪ということと、それから罪障に対しては、無罪ですね。別の次元とちがいますかねえ。

本多　というと、どういう次元のちがい。

三嶋　悪人が仮りに救われるとするでしょう。それは罪人だから救われるんですわね。悪人である限りの悪人が救われるんじゃないと思うんです。

本多　その悪人である限り悪人というのは、やっぱり一つの抽象的に固定した状態じゃないでしょうか。

三嶋　だからね、そこから場所的論理がね、入ってくるんじゃないかと思って、うかがったんですけどね。

本多　ああ、悪の方からですか。

三嶋　そういう問題にですね、善悪といって、我々ただ実際的に考えるだけでしょう。それを場所的論理で、なんとか、おそらく解けるんじゃないかな、とかねてから思っているから質問したんですが。僕自身は罪と悪とは別のこととして、いろいろと考えて……。

中山　こりゃ先生ね。最も難しい専門的問題やから、あしたの宗教論にいよいよ入ってからの問題として残しておきましょう。聞いとるもんも、ぼうっとしてしまわんならん。

三嶋　善人が救われるのでもないでしょ。悪人が救われるのでもないんですよ。罪人が救われる。ね。で、罪人であればですよ、善人でも悪人でも救われるんですよ、そうでしょう。罪人であって、悪人が救われるんではない、罪人であって、善人が救われるのでもないんですよ。罪人であるから救われるわけでしょ。

岡　罪人であって悪人であるということは自覚があるということで、罪人であって善人であるということは罪人たることの自覚がうすい……。

三嶋　キリスト教的に云えばそうですけど、仏教的に云うと自覚は必要ないんで。罪人であるということが、すなわち仏

の救いの条件ですね、そうでしょ。だから本人の自覚は問題に入らないはずなんですよ、仏教で云えば。キリスト教的にはいくつかのセクトがあって本人の自覚を条件にするセクトもありますけど、しかしキリスト教でも云ってしませんわね、そうでしょ。「衆生本来仏」というのはそういうことでしょう。

岡　ですけどね、それはあのう……、自覚する人によって救われていく、だから衆生済度ということがあるんではないでしょうかね。でなければ、衆生済度ということも要らないんじゃないですか。

三嶋　いや、そう云ってもいいんです。だからね、善悪というのと罪と、まさにその意味で別なわけでしょう。

岡　え、別ですね。

三嶋　別でしょ。善人でも罪障を自覚しなければ悟りに入らんわけでしょ。そういうことになるんじゃないですか。

本多　その善と悪と一応分けておられるでしょう。分けて、罪というのをまん中に入れておられますけどね。

三嶋　いや、まん中じゃないです。別なんです。

本多　いや、善と悪と別のところに分けておられることが……。

三嶋　だから別になるかどうかを質問したわけですよ。

本多　あ、善悪と罪と。

三嶋　いや、善即悪、悪即善とかね、例によってその矛盾的相即で解けるのかということが……。

本多　善と悪の問題ですか。

三嶋　善悪に罪がからむわけです。

網沢　罪の反対は何ですか。

三嶋　善即悪と悪即善とね、やればそう分ける必要はないわけでしょ。

網沢　罪と何ですか。

三嶋　そういう論法が当てはまるかどうかということが僕わからんわけです。要するに西洋的な発想でいくと、まあ結局は解けないんですけど、ある程度まではかなりいけると思うんですよね。

宮崎　先生のいわゆる罪という意味が、ちょっとどういう意味で使われているのかわかりませんが。

本多　これはいろいろと説明を要する……。（笑）

三嶋　我々が罪という時にはすぐにね、アダムとイブの原罪を発想するのが習慣になってしまっているでしょう。そこから罪と悪を結びつける常識が生まれていると思うんですがね。罪というのは、すなわち西田哲学でいえば、まさに「場所」を意味するもんだと、僕はかねてから思っているんですがね。そうした時にその善悪と罪がどう結びつくかという、どっかで結びつかなきゃ悟りでもあるいは救いでも成り立たん……。

岡　矛盾ということが実は罪。でまあ、矛盾的自己同一ということですね。

三嶋　と言ってもいいわけですね。この論文の表現でいえばそう云っていいわけです。

岡　西洋的な言葉でいいますと、罪の結果、人間は矛盾的な自己同一においてしか存在しえないと……。

三嶋　そういう風な解き方をしますけど、罪にある時点があったかどうかね、あまりに象徴的でしょう。何か無理な時期があったと。ある時点までは無罪で、それ以後、罪に入ったかというね。あまりにもこう象徴的でね。

本多　ああなるほど。

三嶋　そういうもんじゃないと思うんです。

本多　なるほど、それはね僕は非常に深い関心を持ってますがね。つまり堕罪ね。以前と以後を分けてね、堕罪以前は同一性の世界であり、以後は矛盾相即の世界になっとるじゃないかというね。（笑）そういう図式的な分け方が……　これはちょっと、そうじゃ……。

三嶋　これは物語を正直に取りすぎてると思うんですよ。一種の寓話的な表現だと思うんですがね、あの解き方は。

岡　そう話さないと普通の人にはわからないわけですね。

本多　それはね、矛盾相即は、それを含むんじゃないですか、両方。

三嶋　それをあらわされたのがこの西田哲学というか。で、善悪というのは少くとも「場所」というものではないでしょ、また別のことがらですよね、善悪というのは。

本多　そうすると善は象徴的にいうと何ですか。先生の考えておられる？

三嶋　善悪ですか。

本多　いや、善、善と悪。

三嶋　え、罪は聖書から出てきますけどね、善悪は、僕は聖書からは出てこないと思いますね。

本多　どこにあるんですか。状態ですか。

三嶋　ギリシャ的な思想。むしろね、ソースがちがうと僕は思うんです。善悪という思想はね。

本多　いや、それはどこでも云われているでしょ、善悪というのは。日本でも云われているし、聖書の世界でも云われているし、ギリシャでも云われているけど、今までおっしゃっている善悪というのは、どういう意味の善悪ですか、それがよくわからないんです。

三嶋　僕がいう意味ですか。僕は罪についてはそう思っているんですけどね、善悪についてのはっきりした定義をどうすればいいかが、僕自身きまってない。

本多　あっ、どこに定着させていいか。

三嶋　悪というものをどう定義すればいいかがね、僕自身には。たとえば先生がおっしゃったようにね、悪人が悪い、泥棒が泥棒をしようとする時はね、善悪の選択じゃなくてね、悪人が仮りに悪をする時は、善と悪と並べてどっち取ろうかとするんじゃなくて、二つの善のうちのどっちを取ろうかと

選択をしているはずなんですね。そうでしょう。で、二つの善のうちの一つを取ればですね、別の観点から云えば、それが悪になるわけですよ。善をとったら見方をかえれば悪になってるわけでしょ。で、こっちの善を取ったってやっぱり悪になってるかも知れない。そういう意味では、善悪というのは、何か一つのものではあるけれど、それでいて悪が何かは、僕は定義できないんですけどね。罪というのは、僕は「場所」のようなもんだと思いますね。むしろ何かあまりにも結果的にふつう考えがちですね。結果的でなかったら、こう理論的にね。基底的といいますか。ここには無基底という言葉が出てきますけどね。基底が無いという言葉が出てくるけど、罪というのは人間の基底的なものにおいて考えられ、あるいは何かが結果として考えられたりですね、そういう風に思ってるんですが。罪に関してはかなり積極的にいろいろ考えているんですが。

中山 これはね、善悪を論じる時にはいろいろ立場があるんですよ。

本多 ああたくさんありますから、焦点をしぼらないと。

中山 で、むずかしい問題も含んでいる。例えばね、人間のこしらえた法律に反したものは悪と云うといってですよ、あるいは罪とか。道徳的な善悪はこれまた違うでしょう、えー。罪を犯したと法律的には云うておっても、道徳的にはね、一緒になれんですよ。そしたらまた、歎異抄のいうてある善悪というものは、道徳的な悪ではないのであって、宗教的な善悪という。

本多 また違うですね、次元が。

中山 そこでやっぱり道徳的な善悪とは、悪とは、どういうことかと。宗教的の善悪とはどういうことかと。はっきり区別しておいて議論せんことには、これはまあ、混同してくると思うんですね。仏教の悪の根元は「業」なんですよ。それを「悪業」という。悪業とか善業とか、業といったら行為でしょ。で、さきがた一番初め、あんたがちょっとほのめかしようなったが、悪ちゅうものは、その業の結果と見てもいいわけなんですね、仏教では。

本多 あ、悪はね。

三嶋 その業が罪障では……。

中山 そこで業というものが、行為になりよるんですよ、その立場からいうたら、そんであんたの考え方に接近してくる……。

本多 業ならざるはなし、と。

中山 そうそう、業ならざるはなし、え。すべて業、と云う。

本多 と、悪ならざるはなし。それは宗教的な次元での悪ですね。

中山 そうそうそう。これ法律的にはね、それは得手勝手なもんですよ、法律にそむいたのが悪でしょ、で罪でしょ。

本多 道徳的次元までは考えやすいけど、宗教的次元……。

中山　宗教的善悪、そいじゃから歎異抄の「善人なおもて往生す」とか「いはんや悪人をや」とか。あの善悪を道徳的に解釈してしまいよるから、とんでもない、宗教の根源的なことから理解されていないということになるんですね。歎異抄において善悪の問題をそういうところから問題にしないと。これは宗教的な善悪なんだと。で、そうかと云ってですね、宗教的善悪と道徳的善悪と無関係かというと、無関係ではないことになってきよる。

本多　どういう風にして関係しているかということが全く大きな問題ですね。

中山　そうそう。

三嶋　それがわからん。

中山　そうなってくるというと、善即悪、悪即善という、これは仏教の動かん原則なんですね、だいたい矛盾的相即という時には善悪はないでしょ、そんなもん、そうでしょ。

三嶋　別なところで云われていることですね。

中山　ほいで、これ、その主語面、述語面でいうたら、主語面的方向にいったやつが悪なんですよ、ほんといえば。この矛盾的相即を使うなら。そういうことになりよる。善悪なんて区別があるという方がこっちの方向にいくんですよ、こっち向きにいったら善悪無記でしょ、一般的になってしまう、という。矛盾的相即、あのう、自己同一を使えばですね、いつでも自己否定しておるものが結びついているということは、云い換えてみたら、いつでも悪をもっておるということなんですよ、人間というものは。で、これが一面観的にこっち向きに行きよると善悪になってきよる、とこういう。悪というものはこっちから出てくると。そういうことと違いまっか。それはただし、罪と悪との区別ではありませんで、まだ。善悪のことを云いよるのであって、その悪という問題は、うるさい問題ということから、強いてこの立場から云うならですね、一面的にこっち出てくるやつ、これは多の方向ですからね、こっちの方で善悪。ほじゃから善とか悪とかいうことは抽象面だと、こういう。主語面的限定において善悪が論じられると、こういう。

本多　ああ主語面的ね。

中山　述語面的やなしに。

本多　主語面的限定といいますと、抽象的実体化ということですね。

中山　そうそう。

三嶋　性善説とか性悪説とかいうものは、どれほどの根拠があるのですか、仏教的に云いますと。

中山　仏教には根拠はないですよ、ほんと云うたら、え。仏教ではね、道徳上の善悪なんて問題にしやしまへん。そんなもんは人間の勝手な区別やと、こういう。ただ真理にそむいたものは悪、とこういう、簡単に云えば、真理に従うていくことが善だという。

本多　で、罪と善悪の区別は何かあるのですか。
中山　それはまた別問題になってくる。罪というものも、悪ということも、世間では、混同して使うとるでしょう。ほじゃけれども、区別しながらですね、いつでも罪といったら悪を含んでおるし、悪といえばいつでもこの何らかの形で、罪というものが含まれておると、そういうものを罪といい悪といい、しとるのと違いますか。我々はそれをはっきり区別して云いよりますけどね、善と悪と。罪と悪と区別するならそういうことになるでしょうな。ほやから真理にそむいたということになってくると、単なる悪ではないことになってくるんですよ。宗教的にはやっぱり罪ということに傾いてくると思うんですね。
三嶋　善人にも罪障はありますね。
中山　ええ、そうそう。
本多　第一、善人があるかと、悪人というのがあるのかと、いうことですよ。
中山　そうそう。
三嶋　そういうことになりますね。
本多　僕はあると思うてないですから初めから。
三嶋　経験的にはそういうことになりますが、理論的にはどうなるかと。経験的にはそうですわね。
中山　仏教ではみんなアホーやと云わなあ、罪や悪やと云わんと。で、アホーが悪をしやすいということになりよるだけのもんじゃ。真理を知らんから。そいで一般に、凡人、とこういう、凡夫、とこう云いまんのや。これはね、善と悪とを分けるとですね。仏教はもう一つ、善悪無キというてね……。
本多　キはどんな字ですか。
中山　無キいうたらあのう記入の記、善悪無記、とこういう。まあいうたら善でもなし悪でもなし、ということなんですね、無記とこういう。
三嶋　この論文よくは読んでないんですが、道徳を論じ、宗教を論じておりますが、宗教的世界観というのは……。
中山　これはねえ、宗教的世界観に、ずーっとあしたあたりからもし入るとしたら、そこへはっきり出てきます、そらあ、はっきり出てきます。
本多　死とかね。
中山　それを云わなんだら宗教的世界観は出てきはしません。
三嶋　死は出てきます。それは時と永遠で、当然出てきます、生死はそれはどうしても。それは論題として意識しなくたって素材として入れざるを得ん問題でしょ。
中山　そうそうそう、当然入ってこな。その問題解決せなんだら……。
三嶋　それはもう、だからその、罪というものについては、僕は答えてないように思うんですけどね。
本多　先生がね、おっしゃっている罪というのはやっぱりキリスト教的な概念でしょ。

三嶋　発想がそうですね。

本多　これはやっぱりね、発想が違うんですね。これは迷いという言葉がありますが、ちょっとみたらこうね……。

三嶋　あります。いくつか「迷い」が出てきます。煩悩。

中山　迷いなんていうものは、悪の根源をおさえたもんですよ、仏教では。

三嶋　じゃ仏教は罪なしで成り立つ宗教になるのかどうか、それがわからん。

本多　神との対決……。

三嶋　西田哲学でもいいですけどね、罪なしですませる哲学なのかどうか、そこんとこがわからない。まあ、僕個人の問題としてはね、人生観といいますか、悪とかね、煩悩というのは、さしたることでないですよ、僕自身にとっては。自分が、自分に何か罪障があるかどうかということの方が、僕にとっては一瞬一瞬の苦痛の種ですよ、僕自身ね。確かに理論的には、発想はキリスト教ですけれども、しかし先生がおっしゃったように、人間、完全な善人はいないんですから、完全な悪人もいない。僕だって、まあ、中間者ですわね。程度の問題でしょ。だからそれほど僕は切実な問題でないんですよ、生きていくのに。

本多　悪人であろうが、善人であろうが、そんなこと関係ない、と。

三嶋　ま、関係ないわけですね、程度の問題ですからね。日によっても違うでしょ。今日は善人であしたは悪人になるかも知れん、日によって違うでしょ。どなたもそうでしょうし。煩悩と云ったってこれは……。

本多　みんな持っとるんだから……。

三嶋　これは消しようないんですからね。

本多　けれども罪といったら一回限りの、自分だけのものとして責めますね、自分を。誰でも彼でも犯すんでしょうけどね。

三嶋　罪があるかどうかということが、僕を責めますね。

本多　じゃ、罪を自分が犯す……。

三嶋　犯す、犯さんというよりも、罪と切り離せない存在なのか、ということが僕を責めます。犯したかどうかというのは、これは悪の問題で解決できるわけですよね。むしろ悪の問題。罪を犯す、犯さんの問題と、僕は別なところで考えるんですがね。犯す、犯さんという、そういうこと入れると、時間を切断してね、それこそ悪の方に行くと思うんですよね。

本多　ちょっと待って下さい。僕はもう少し区別したいんですけどね。その罪を犯すか犯さんかじゃなくて、罪があるかどうかという場合にね……。

三嶋　罪障と云った方がいいですわね。

本多　罪障ね、この罪障というのは、自分の中にとどまっているものですね、一つの状態として。

三嶋　状態か何か知りませんがね。

本多　習性と云ってもいいですね。そこから一つ一つの個々の罪が出てくる時は出てくるわけでしょ。

三嶋　いわゆる罪が。悪といわれる罪でしょ。結果としての罪というのは先生が云われた悪と云っていいのでしょ。

本多　そうすると罪障というのは、罪の原因として考えられるわけですか。

三嶋　そう簡単に割り切ってないんですがね。そう簡単に割り切れんのですね。例えば人間の根底が無かどうか、というような問と同じ形で、僕問うているんですけどね。

本多　ああ、そりゃ、そりゃ深い。なら原罪というような意味ですか。

三嶋　そういうことです。

本多　ああ、それでよくわかりました、初めからそう云ってくれたらようわかるんですが。そりゃあ、あのう、先生が、原罪が自分にあるかどうか、ということが切実な自分の個人的な問題だというんですか。

三嶋　そういうことです。

本多　よくわかりました。僕は、もう、それはもう、ある、と。初めから自明的なことですわ、もう。

三嶋　それにしてはこう、朗らかに……（一同大笑）

本多　ほおう、いやあ、あると自覚してから明るくなったんですよ。（笑）明るくなったとすればね。

三嶋　みんな持っとるから。

中山　いやどうもご苦労さんでした。まあ、この、ちょっと一服でもして……。（笑）

本多　いやいや、ようわかりましたよ、やっとわかりました。（笑）

中山　人の話、聞いとると面白いわな。（笑）

三嶋　悪っていうのはね、僕はそれほど苦にならないのですがね。

本多　ぼくは原罪があるということはね――。

三嶋　知らず知らずに犯しているに違いないんですよね、悪はね。だけどしかし罪というのは僕は恐いなあ。地獄に落ちるでしょう。例えて云えばね、罪深い人間であれば。

本多　あのね、そこまで打ちあけてくだすったんで云いますけど、まず原罪をもっている、ということをはっきり自覚することが、涅槃に入る道だと思うんですよ。

三嶋　これは非常に理論的ですね、問題には答えてないようだけど。ひき出せるかどうか知りたいんですわ。直接答えてくれなくても。

本多　それは、原罪は有るかどうかという問題は、結局この立場では、迷いの根源、無明があるかどうかということじゃないですか。僕はそう思ってますけどね、無明があるのはこれは自明的なことでね、むしろ僕にとっては自分が罪を犯すかどうかということの方が切実な、日々の問題ですね。

三嶋　当然犯していると思っている、その点では犯すかどう

かというのは、犯しているに違いない。

本多　違いない、犯しているに違いない、という推理ではなくて、自分の体験ですからね。

三嶋　僕は毎日、あることを思っただけでも悪だとすればね、完全に善なる生活などしたことないんだもんな。

岡　存在すること自身が、人を傷つけていきますからね。

三嶋　そうなんですよ、僕なんかおらん方がええ、（笑）ある意味ではね。そう思うことあるでしょ。毎日そう思ってるわけじゃないけど、（笑）　たまには、おらん方がいいと。

本多　僕はね、正直に云いますと、信仰に入る前は、ずうっとそれに苦しんだですよ。その何か自分の存在そのものが、罪、理性の働きそのものがけがれていると、どんなに正しいことを考えたって、それはけがれている、間違っとるというね。生きることが人を殺してると。傷つけとるとね。実際、具体的に僕の境遇にそういうことがあったわけですね。僕が学問するということが、弟を犠牲にすることであったわけですよ。父が死んで、母をね、ものすごく犠牲にしたわけですよ。

三嶋　こうして集まっている方は、同じことを考えてらっしゃるんじゃないかと思うんですがね。いわゆる哲学というものに近寄ってくるほどの方は、そういうものを持ってるんじゃないですか。

本多　ま、やっぱりね、自覚というのは自分を超えるものであることかどうか、はっきり書いてあったんですね。で、越えるものに出合った時に、自分が原罪もっている、原罪がある、ということがはっきりわかるんじゃないかと思うんですよね。

三嶋　それで解決つきますか、理論的に……。

本多　いや、理論じゃないです、これは体験ですね。

三嶋　「超越者と自分」で出てくるもんですか。

本多　と、思いますね。だから神と自己との関係から、自分が悪人だと、しかも単なる悪人ではないですね、善悪不二というような立場も出てくるんじゃないですか。

三嶋　善悪不二の世界はわかるけど、罪と無罪とは、これは……。

本多　罪障と無罪障とは一つではないですね。

三嶋　でしょう。罪障即無罪障ということにはならんでしょう、なりますか。

本多　いや、それはなると思うんですが、それはやっぱり展開すればなるですね。

三嶋　しかし信仰との間にはそうそう……。

本多　あのう罪障と無罪障とは全然反対ですね、罪障と無罪障といったら、罪があるということと、罪がないという状態。で信仰においてもそれは相即的になる、と思うんですけどね。

三嶋　まあ大まかに云うとそう、僕もそう考える。

本多　矛盾相即、絶対矛盾の自己同一だと。

三嶋　いろいろな方法があると思ってね、解決するのに。

本多　でもね、僕は基本的には同じだと思う。僕はね、そんな二つの方法てのはないと思うんですよ。絶対矛盾の自己同一というのは、本当に現実の具体的な構造の論理だとすればね、そういうキリスト教の問題も、仏教の問題も同時に、人間のすべての問題の根本がね、それで説明できると、はずのもんだろうと思って、ええ。

三嶋　因果とは、無とは、置きかえると、「場所」をね。

本多　はあはあ……。

三嶋　それを罪と置きかえる。

本多　いや罪が「場所」ではないですね、西田哲学では。もっとこれは形而上学という言葉を使ったら、使っていいのかどうか、西田哲学でわかりませんけどね。「場所」というのはもっと普遍的な概念のようですね。

X氏　場所において罪が生まれるんじゃないですか。

本多　場所において、はあはあ。

岡　あんまり簡単に考えるといけないんですけど、このう、キリスト教で十字架のことを矛盾の交錯だというんですね。その矛盾の交錯において罪を許す、という。そこにおいて罪の贖(あがな)いがなされたんだ、交わったところでですね。神から離れることが罪なんですね。絶対者から離れることは、これは人間の存在を脅やかすこと自身になるんですね。

本多　そうです。

岡　それが罪だと云ってますね。そうしますと罪は、神から離れてると自覚する時に、絶対者にもう一度立ち戻ろうという。

本多　相即の関係が成立するわけでしょう、自覚されるわけですよね。だから神という罪のない世界と、罪だらけの自分の世界が、相即的に結びつく、絶対に相い入れないという自覚を通じてね。

三嶋　しかし、どうもわからん。

本多　だけど僕はほんとにようわかってよかったですわ、先生の問題が。おとなしく黙っておられるから、こんな近くしておってようわからなかったんですから。どうですか、八時までということで、あまり遅くなってもいけないらしいんですが、どなたでも結構ですから、あと十分間ありますから、どうぞ。

岡　「衆生本来仏なり」という言葉、そういうことが土台にあって初めて、自己矛盾、矛盾的自己同一ということが云えるんであって、もしそれがなければ、これも云えないことではないでしょうかね。私自身はどうしてもキリスト教的になりますけど、すべては善であるという考えがあります。しかしそれにもかかわらず現実はそうじゃない。すべては善であるのに実際は善でない、即ち矛盾ですね。自己同一ということも、むしろそういう姿をあらわしていると……。

本多　あのう、私ちょっと思ったんですがね。これでね、(紙

を出す）まるめて栓をしますね。そしたらこの茶びんは用をなさんでしょ。そしたらこれは矛盾したことになっとるですね。で、これとったら矛盾はなくなる、本当の茶びんに戻る、そういう意味での矛盾という言葉とですね、あのう、矛盾的自己同一とは、違うという気がするんですけどね。あ、どうも。（笑）

第一章　終

八木誠一・秋月龍珉　対談

新刊　キリスト教の誕生　¥一・九〇〇

発行所　青土社

東京都千代田区神田神保町一―二九

好評発売中　歴史のイエスを語る　¥二・〇〇〇

発行所　春秋社

東京都千代田区外神田二―一八―六

坐禅に生きた　古仏耕山　加藤耕山老師随聞記

秋月龍珉・柳瀬有禅共著

¥一、六〇〇　〒300

長い修行の功を積み、いったんは仏になり、すっぽりかんと赤の凡夫に立戻られた稀有な禅僧の姿に、宗教の本質がある――禅界の巨星。耕山老師の遍歴と徹底した境地を聴き書きと随聞記で感動的に綴る言行録。

〒113　東京都文京区千駄木二―八―三

柏樹社